



### 伊波貝塚（史跡）

明治37年(1904年)に来沖した鳥居龍藏氏は、石川のチヌヒンチャ貝塚を発見し、大正9年に大山柏氏によって発掘調査がおこなわれ、伊波貝塚が発見されました。石川市街地の南側の丘陵崖下に位置する貝塚は、沖縄諸島の中では貝塚として早い時期に明らかにされた遺跡として有名です。伊波貝塚から出土した土器は、深鉢形で平底、頸部から口縁部にかけて外反しており、伊波式土器と称され縄文時代後期を代表する標識土器として知られています。



### 安慶名城跡（史跡）

具志川安慶名にある国指定の史跡です。城の北側を流れる天願川が別名「大川」と呼ぶことから、別名大川グスクとも呼ばれています。城の形態は、外側と内側に二重の石垣を巡らす、県内では珍しい輪郭式のグスクです。伝承では14世紀頃、安慶名大川按司によって築城されたと言われ、自然の断崖と急傾斜を巧みに利用した山城です。



### 勝連城跡（史跡）

15世紀に活躍した阿麻和利の居城。勝連半島のほぼ中央の丘陵にあり、自然の地形を巧みに生かして築かれた城です。石積みの城壁が優雅で美しく、最も高い一の曲輪に登ると、中城湾や金武湾、その中に浮かぶ島々など太平洋が一望できます。昭和47年5月15日に国の史跡文化財に指定されています。



### 仲原遺跡（史跡）

縄文時代晩期の集落跡です。発見された遺構は、石囲いの堅穴住居跡で11基確認されました。住居1つの規模は2～3m、4～5mで約1～2坪の長方形です。まとまった住宅跡が、きわめて保存のよい状態で東西にかけてやや一直線に並んでいます。土器、石斧、磨石、凹石、骨製品、貝製品が出土しており、また、人骨も5体出土しています。当時の人々の生活様式を知るうえで貴重な資料になっています。

## うるま市の指定文化財一覧

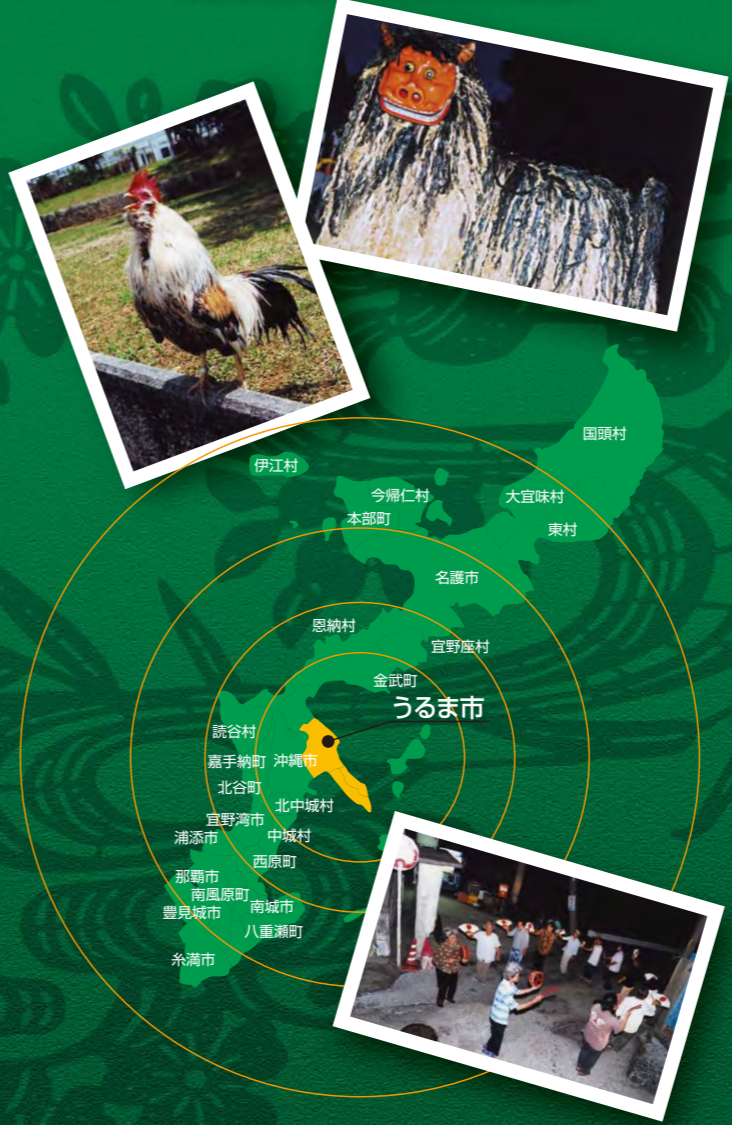
Designated Cultural Properties in URUMA City

種別	名称	指定年月日	所在地
<b>国指定</b>			
史跡	伊波貝塚	昭和47年5月15日	うるま市石川伊波
史跡	安慶名城跡	昭和47年5月15日	うるま市字安慶名
史跡	勝連城跡	昭和47年5月15日	うるま市勝連南風原
史跡	仲原遺跡	昭和61年8月16日	うるま市与那城伊計
<b>県指定</b>			
有形文化財	三線翁長開鐘	昭和30年5月23日	うるま市字喜屋武
有形文化財	三線真壁型	平成6年3月15日	うるま市石川東恩納
有形文化財	勝連間切南風原村文書	昭和52年7月11日	うるま市勝連南風原
史跡	平安名貝塚	昭和31年10月19日	うるま市勝連平安名
史跡	伊波城跡	昭和36年6月15日	うるま市石川伊波
天然記念物	チャーン	平成3年1月16日	うるま市字高江洲
選択文化財	津堅島の唐踊り	昭和53年3月24日	うるま市勝連津堅
<b>市指定</b>			
有形民俗	東恩納平良家葬祭具	昭和56年10月15日	うるま市石川東恩納
有形民俗	伊波金細工鍛冶道具	昭和56年10月15日	うるま市石川伊波
建造物	嘉手刈観音堂	昭和59年6月12日	うるま市石川嘉手刈
有形・無形民俗	伊波メンサー織	昭和63年11月15日	うるま市石川伊波
史跡	平敷屋タキノー	平成2年3月26日	うるま市勝連平敷屋
有形民俗	南風原の村獅子	平成2年3月26日	うるま市勝連南風原
有形民俗	伊波ヌール墓	平成6年3月4日	うるま市石川伊波
工芸品	三線真壁型(大型)	平成6年3月4日	うるま市石川伊波
工芸品	三線平仲知念型(大型)	平成6年3月4日	うるま市石川東恩納
工芸品	三線鴨口与那型(中型)	平成6年3月4日	うるま市石川
有形民俗	地頭代火の神	平成6年3月31日	うるま市勝連浜
史跡	アマミチューの墓	平成6年3月31日	うるま市勝連比嘉
有形民俗	シルミチュー	平成6年3月31日	うるま市勝連比嘉
建造物	ヤンガー	平成7年6月14日	うるま市与那城上原
名勝	犬名河(インナガー)	平成7年6月14日	うるま市与那城伊計
建造物	ガーラ缸	平成7年6月14日	うるま市与那城隣辺
有形民俗	宮城御殿(ナグスクウドゥン)	平成7年6月14日	うるま市与那城宮城
有形民俗	与佐次川(ユサチガー)	平成7年6月14日	うるま市与那城平安座
史跡	平安座西グスク	平成7年6月14日	うるま市与那城平安座
天然記念物	クボウグスクの植物群落	平成9年4月23日	うるま市勝連津堅
有形民俗	中の御嶽	平成9年4月23日	うるま市勝連津堅
史跡	ヤマトウンチュウ墓	平成9年4月23日	うるま市勝連浜
史跡	ワイトゥイ	平成9年4月23日	うるま市勝連平安名
無形民俗	南風原の獅子舞	平成11年3月10日	うるま市勝連南風原
無形民俗	平安名のウムイ・クエーナ	平成11年3月10日	うるま市勝連平安名
無形民俗	平敷屋エイサー	平成11年3月10日	うるま市勝連平敷屋
無形民俗	天願獅子舞	平成11年7月15日	うるま市字天願
無形民俗	田場ティンペー	平成11年7月15日	うるま市字田場
建造物	吉本家	平成12年11月7日	うるま市勝連比嘉
史跡	新川・クボウグスク周辺の障地壕群	平成16年3月3日	うるま市勝連津堅
史跡	兼箇段ジョーミーチャー墓	平成17年2月16日	うるま市字兼箇段
史跡	田場ガー	平成17年2月16日	うるま市字田場
史跡	大田坂	平成17年2月16日	うるま市字大田・川田
史跡	沖縄諮詢会堂跡	平成17年3月1日	うるま市石川
史跡	東恩納博物館跡	平成17年3月1日	うるま市石川東恩納
史跡	石川部落事務所	平成17年3月1日	うるま市石川
無形民俗	越来治置(マラン船の建造技術)	平成17年3月4日	うるま市与那城平安座
無形民俗	宮城ウシデーク	平成17年3月4日	うるま市与那城宮城

## うるま市文化財シリーズ

Designated Cultural Properties in URUMA City

# うるま市の文化財



### 主な文化財関連年表

<b>旧石器時代</b>	うるま市では現在、旧石器時代の遺跡、人骨は確認されていない。
<b>縄文時代</b>	約7000年前 与那城ヤブチ島のジャーネーガマでヤブチ式土器が使われる。 約3500年前 石川の伊波貝塚で伊波式土器が使われる。 (古我地原貝塚、天願貝塚、地荒原貝塚、平安名貝塚) 約2500～2000年前 伊計島の仲原遺跡で仲原式土器が使われ、集落が展開する。 宮城島(シヌグ堂遺跡、高嶺遺跡)、石川東恩納西原、美川原など金武湾一帯の琉球石灰岩台地上にも集落が展開される。
<b>弥生時代</b> ↓ <b>平安時代</b>	約2000年前 具志川グスク崖下で弥生式土器が使われる。 宇堅貝塚で鉄製品が使われる。 平敷屋トバル遺跡や金武湾一帯の沿岸でいわゆる「貝の交易」が行われた。具志川アカジャンガー貝塚でアカジャンガー式土器が使われる。
<b>グスク時代</b>	約700年前ごろ勝連城跡・安慶名城跡・伊波城跡など各地に「グスク」が築かれ投司(アジ)が現れる。中国、朝鮮、日本、東南アジアとの交易を行う。
<b>近世</b>	各地に「間切(まぎり)」が設置され、「大田坂(ウフタバ)」などの「宿道(すくみち)」が整備される。兼箇段で兼箇段ジョーミーチャー墓、伊波では伊波ヌール墓がつくられる。
<b>近現代</b> ↓ <b>戦前</b>	約100年前明治時代以降、屋取(ヤードゥイ)集落の人口が増える。 約80年前に勝連平安名に「ワイトゥイ」が人力で開通する。 約70年前に津堅島新川・クボウグスク周辺障地壕群が構築される。
<b>戦後</b> ↓ <b>現在</b>	昭和20(1945)年、沖縄戦の最中、具志川グスクで集団自決があった。 また嘉手刈のヌチシヌシガマ(ティラガマ)では住民が全員捕虜となる。 その後、沖縄は米軍統治下におかれる。 戦後復興の下、沖縄諮詢会堂、東恩納博物館、石川部落事務所がおかれる。 昭和34(1959)年、宮森小学校ジェット機墜落事故が起きる。 昭和47(1972)年、沖縄が日本へ復帰する。 平成17(2005)年4月1日 具志川市・石川市・勝連町・与那城町が合併し、新市「うるま市」が誕生する。

## うるま市の歴史・文化

豊富な水資源と肥沃で広い土地に恵まれ、かつて砂糖キビの生産量沖縄一を誇り、太平洋戦争後は外国語学校、文芸学校などが創設され、戦後沖縄の文教の中心地として発展してきた歴史を持つ旧具志川市。戦中戦後、米軍により設置された難民収容所や琉球政府の前身である沖縄諮詢会、更には民政府設置など戦中戦後の沖縄政治・経済の中心地として発展してきた旧石川市。おもしろさうしの中で「きむたか」(心豊か・気高い)と称され、大和の京や鎌倉にたとえられるほど繁栄が謳われ、特に城主阿麻和利の時代には最盛期を迎え、平成12年に世界遺産の指定を受けた勝連城跡を有する旧勝連町。約2500年前の沖縄貝塚時代中期のもので沖縄最大の段丘集落跡といわれる「シヌグ堂遺跡」や、与那城王子朝原が授かった西原間切が平田間切、与那城間切と改名を重ね、沖縄県島嶼町制の施行など歴史的な変動を経験した旧与那城町の4市町が合併し、平成17年4月1日に新市「うるま市」が誕生しました。

うるま市は闘牛のメッカで、沖縄一の規模を誇る安慶名闘牛場や石川イベント公園などで、春、秋の全島闘牛大会などが開催され、盛況を呈しています。また、畜産振興と観光闘牛発展のため、闘牛候補牛審査会も毎年行われています。エイサーは青年男女が各地域をまわりながら、先祖の霊をなぐさめる勇壮な踊りで、毎年旧盆におこなわれています。特に勝連平敷屋、与那城屋慶名、具志川赤野のエイサーは県下でも有名で、旧盆の時期には近隣市町村からの見学者で賑わいます。

### 沖縄県うるま市教育委員会

沖縄県うるま市教育委員会 文化課  
TEL(098)973-4400



# うるま市の文化財



## 伊波城跡／史跡

伊波城跡は、北側の断崖を除いた東、南、西側に自然石を無加工のまま積み上げる野面積み(のづら積み)の石垣を持ち、一重だけの城壁をコの字状に巡らす単郭(たんかく)式に築かれています。このグスクは、13世紀に伊波按司によって築城されたと伝えられており、グスク内からはグスク時代の土器や外国産陶磁器等の他に先史時代の土器等も検出されたことから、先史時代から居住していたことが明らかになっています。グスク内には中森城之嶽(火の神)・森城之嶽・三ツ森城之嶽(ウファガリへの通拝所)の三ヶ所の拝所があり、現在もウタキとして崇められており、宇伊波のウマチーの祭祀行事等がグスク内で行われる他、県内各地から多くの参拝者や見学者が訪れています。



## 嘉手苅観音堂／有形文化財(建造物)

5代目の伊波按司が、日秀上人(にっしゅうしょうにん)に勧進して建立したお堂であると伝えられています。初めは伊波の城下に建てられましたが、2度も火災に見舞われ、現在の場所、嘉手苅に移転されています。嘉手苅観音堂は子育て観音様としても崇められ、各地から参拝者が訪れます。宇嘉手苅では旧暦の1月7日には観音堂に田芋をお供えし、村の繁栄を祈願する年頭の行事が行われています。



## 伊波ヌール墓／有形民俗文化財

村の祭祀行事を司った歴代の伊波ヌール(伊波のノロ)が葬られている墓であると伝えられています。平成6年に実施された墓の調査で、琉球石灰岩の家形厨子甕(いえがたずしがめ)、マンガン掛厨子甕、転用厨子甕(生活雑器)等が確認され、甕の中にはそれぞれ2体分の骨が納骨されているのが確認されました。お墓は崖下の洞穴を利用した掘りこみ式のお墓で築造年代は約300年前のものだと推定されています。



## 石川部落事務所／史跡

昭和7年ごろに建築された石川部落事務所は、昭和20年から25年まで戦後初の石川市役所庁舎として使用されていました。昭和20年4月25日、軍政府によって石川市長に屋次次郎氏が任命され、同年9月25日初の市長選挙で横田英氏が当選。市長を含め38名の職員がこの建物で働いていました。



## 沖繩諮詢会堂跡／史跡

沖繩戦後初の中央政治機構で「沖繩諮詢会」の施設として使用されていました。沖繩諮詢会は昭和20年8月、米軍政府に召集された各地区収容所の住民代表が行った投票において、15人の委員が選出され発足しました。昭和21年4月の沖繩中央政府発足により、その機能が東恩納に移るまで使用されていました。



## 南風原の村獅子／有形民俗文化財

勝連南風原の北西部、南風原139番地の路肩と南風原170番地南西の畑地の角地にあるサンゴ石灰岩を加工して作った素朴な獅子像です。村のフーチー(邪気払い)として、旧南風原村が勝連城跡南側の元島原より移動した時(1726年)、村の境界として東西南北の4角に置かれたと伝えられています。現在では北側と西側のみが残っているだけですが、集落の研究や民俗資料として貴重なものです。



- 国指定文化財
- 県指定文化財
- 市指定文化財



## 東恩納博物館跡／史跡

沖繩戦後初の博物館として使用されていました。沖繩の文化を在留している外国人に広めようと、軍政府文教部長ハンナ少佐の提言により昭和20年8月に「沖繩陳列館」として開館しました。翌年4月には沖繩民政府に移管され、「東恩納博物館」と改称され、昭和28年5月に首里博物館の新築に伴い合併され、現在の沖繩県立博物館の前身となりました。



## 田場ガー／史跡

別名「ウプガー」とも呼ばれ、古くから地域で正月の若水、子供が生まれた時のカーウリー・産水、生活・農業用水等に利用されてきました。湧き口を囲んだ二つの池と水神を祀った祠、池の水貯めをするマグサ、歩き道の石敷き、二箇所の降り口、洗濯場があります。平成11年に正面上部が一部崩壊しましたが、区民をはじめ関係者の努力により平成16年に修復され、現在も字行事として旧暦正月にカー捧ぎが執り行われています。



## 大田坂(うふたひら)／史跡

今から約200年ほど前にあかぼんた掟と玉城親雲上と上門小ビニーの三者の企画と設計で施工され、地元や近隣の住民から資材の協力を得て完成したと伝えられています。幅2~3m、全長300mにおよび、石灰岩を敷き詰めた石畳で、首里王府から各間切間の伝達に利用された道で、宿道(現在の国道にあたる)としても利用された歴史の道です。



## ヤンガー／有形文化財(建造物)

宮城島は自然の湧水がたくさんあることで知られています。特に上原のヤンガーは、水質がよく水量も豊富で、上原、宮城両区民の飲料水として多く利用されてきました。ヤンガーは、1849年に上原・宮城の住民の飲み水の確保の為、当時の与那城間切の地頭代(現在の町長を示す)名嘉村親雲上と惣耕作当(地域の農業振興の責任者)池味親雲上が住民19人の協力を得て、改修させました。上の溜め池は飲料用、下は洗濯、芋や野菜洗い、水浴びなどの生活用水として利用されました。更に、用水路から流れる水を利用して2150坪(約7000㎡)の水田を新たに拓くことができ、地頭代等はこの功勞により王府から表彰されたと伝承されています。また昔は、子どもが生まれるとこの清水を産湯にしたことから、ウプガーとも呼ばれてます。現在は、毎年正月に清水を取る習わしであるウビナリーがあり、各門中がヤンガーを拝み、健康祈願を行います。



## 与次川(ユサチガー)／有形民俗文化財

現在のユサチガーは、1736~1799年のいずれかの年に造られたと考えられています。このユサチガーを平安座島では、ウビカーとも呼び、子どもの誕生には、産水として汲んできました。また、ウビナディーは正月3日に門中一族がユサチガーに集まり、子孫繁栄、無病息災を聖泉に祈願する、伝統行事として平安座人の心よりどころとなって代々続いています。



## アマミチューの墓／史跡

勝連浜比嘉島の東方海岸にアマンジと呼ばれる岩屋の小島があり、そこには洞穴を囲い込んだ墓があります。地元では沖繩を誕生させた、琉球開闢伝説の祖神アマミチュー、シルミチューの男女二神及び他の神が祀られていると伝えられています。毎年、年頭捧ぎには比嘉のノロ(祝女)が中心となって島の人々が多数参加して豊饒・無病息災・子孫繁栄を祈願しています。



## 平安名貝塚／史跡

1955年に行われた多和田真淳氏による発掘調査で、櫛目の文様がある土器が発見され、多和田氏によって平安名式土器と命名されました。その他にも菰堂式土器、大山式土器などの縄文時代後期の土器や石斧、骨製品、貝製品等も出土しています。



## ホワイトウイ／史跡

ホワイトウイは、勝連平安名南西部(比殿原、嘉慶名久)の農耕地に通じる断崖を掘削した農道です。長年、村人は比殿バントの急崖の山道を登り降りしていましたが、この苦難を解消するために、昭和7年から同10年にかけてこの断崖を掘削、横断農道を開通させました。長さ約150m高さは最高所で20mもあります。当時のトウグエー(金鍬)やカニガラ(石割棒)などを駆使した人々の難工事の跡が刻まれており、その苦難の歴史を知る上で重要な手がかりとなっています。正式名称は比殿農道ですが、割って取ったという意味でホワイトウイと呼ばれています。

## 吉本家／有形文化財(建造物)

吉本家の主屋は、明治末頃、チャギ(イヌマキ)を使用して建てられた貫木屋形式の本瓦葺き平屋です。屋敷構は、琉球石灰岩を用い、各石の形を互いにかみ合うように切り合わせて積んだ、あいかた積み(かた積み)の石垣で囲い、門を入ると正面に石造りのヒンブン(外部からの目隠し、家の厄除け)が築かれています。主屋は敷地のほぼ中央に配し、北西側には、フル(豚小屋を兼ねた便所)、南側には自然の岩を利用した石庭があります。主屋の裏側には、アタイ(敷地内にある野菜畑)があり、台所や裏座を増築していますが、全体的によく保存され、沖繩の地方に残る、伝統的な建築様式を色濃く残しています。平成22年4月、焼失し、現在は石垣だけが残っています。



## シルミチュー／有形民俗文化財

勝連浜比嘉島の南南東端の森の中に大きな洞穴があり、琉球開闢伝説の祖神、アマミチュー、シルミチューの居住したところと伝えられています。洞穴内には鍾乳洞の陰石があり、子宝の授かる霊石として崇拝され、信仰圏の広い貴重な霊場です。



## ガーラ缸(はし)／有形文化財(建造物)

ガーラ缸は、昭和3年の天皇即位の年に、鏡辺に住む学童が与勝尋常高等小学校へ通う通学路として、ガーラの山林を切り通して長い年月をかけた建設された石缸です。それ以前は木の橋で、大雨が降ると流されてしまつ危険な状態であったので学童の安全面から建設されました。石缸は高さ5m、幅2m、横断延長5mの石だけでアーチ型に造られており、その上から通行人等が通って重圧をかければかかるほど石缸がしまつてますます固くなっていくという缸です。近代の石造建造物のすばらしさが建築研究者から見直されている意味でホワイトウイと呼ばれています。



## 平敷屋タキノ／史跡

1727年に脇地頭としてこの地に配された平敷屋朝敏(へしきやちよびん)は、水不足に悩む農民のために、ため池を掘削し、このときに掘り出した土を盛り上げて築いたのが「平敷屋タキノ」です。御嶽やヒータチムイ(のろし台)も隣接することから、村落史研究からも重要な史跡になっています。近年住宅化が進み、池の大部分が改修・縮小されましたが、朝敏の和歌の記念碑も設置され、現在でも勝連半島を取り巻く太平洋を眺望できる景勝地です。

## 新川・クボウグスク周辺陣地壕群／史跡

新川・クボウグスク周辺の陣地壕群は、勝連津堅島の最南端に位置する新川グスクやクボウグスク(御嶽)が立地する岩山を利用して構築されています。

戦前、津堅島は中城湾要塞建設において軍事上の要塞として早くから重視され、1941(昭和16)年頃から中城湾要塞砲兵隊第一中隊が配備され、島の中央部を中心に重砲陣地が築かれました。なかでも最高所36m(通称三六陣地)の新川グスクは2段に上った自然の洞窟があり、この洞窟を中心に地下壕を掘り加え津堅島守備隊の本部壕としました。この本部壕を取り巻くように、野砲陣地、カノン(加農)砲陣地、歩兵小隊主力陣地、機関銃陣地、対戦車壕等が築かれました。太平洋戦争で市内唯一の激戦地となった津堅島の陣地壕群は現在でも、戦の歴史と軍事上の要塞等を知る上で貴重な戦争遺跡です。

